

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別段承認雜誌) 第三五二号
昭和四十七年四月二十五日印刷 昭和四十七年五月一日発行



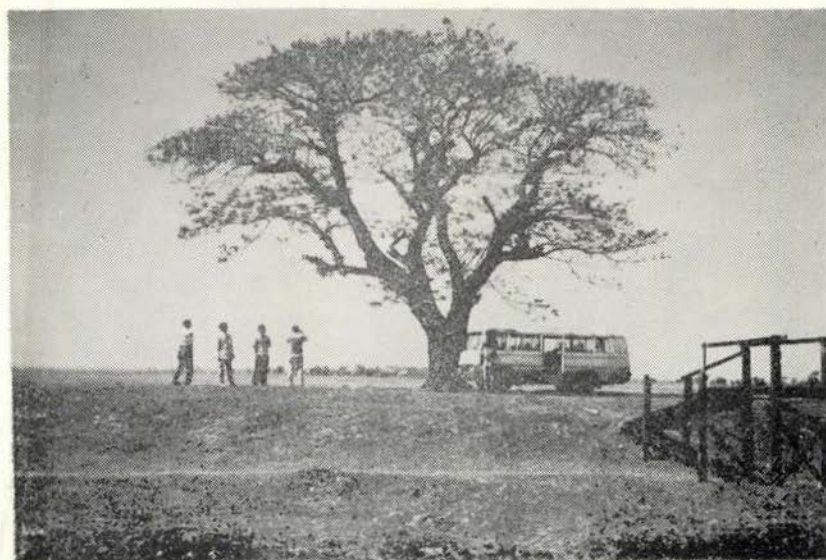
第三十八卷

第五号



1972
5

五 月 号



—目 次—

表紙 「両国回向院」松涛達文画

寿塔開眼……………	岸 信 宏…………	(2)
私の「ふる里」……………	八木義徳・前田繁子…………	(7)
私学経営者の半生……………	野 口 健 策…………	(10)
生と死……………	佐 竹 隆 三…………	(14)
聖典解説④ 一紙小消息〈第二回〉……………	岸 覚 勇…………	(19)
異僧「真覚」第五回……………	柴 田 六五郎…………	(22)
浄土宗史夜話④ 百万べん念仏……………	三 田 全 信…………	(26)
「道」岩間への道……………	高 橋 良 和…………	(30)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて……………		(32)



語和聲念

物か心かの問題は古く、また今日の問題でもある。将来、ながくこの問題は残つてゆくことであろう。

今日は科学万能の時代である。精神を主とする側からみれば、いつの世においても、物質万能にみえることであろう。宗教は精神の側にあることであるから、物質よりも精神を重ずることはいうまでもない。科学の進歩は今日止ることがない。科学に社会の主座をしめられた時、人間は疎外される。物質万能の時代とは、正しく今日の時代である。しかし、それでは社会はゆがみ、人間は歪んでくる。このような時代にあつては精神が強靱でなければならぬ。精神の強靱さは何によつてきたえられるか。倫理は正しい精神のよすがとなるでしょう。しかし、今日動揺の世間にあつては倫理・道徳は、その基準を定めがたい。だとするならば、その根源にさかのぼる宗教によらざるを得ない。宗教は人間をその原点においてとらえるものである。そこまでさかのぼることによつて人間の精神は強靱になり得る。その動ぜざるものにいたる道はたしかにけわしい。そしてかたい。

しかし、その道だけしかなければ、その道をゆくより外はない。その道は物質をつつみつつ開けているのである。仏者のいう物心一如とはそのことである。しかし、先導するものは心である。「唯心造」ということはあるが、決して物をしりぞけているものではない。心が先導するという意味でなければならぬ。今こそ宗教によつて心をきたえなければならぬ。それには、まづ宗教にとび込むことである。己れを空しくして宗教にとび込むことである。原点に還つて空しくしない、そこから甦つてくることであると思う。ふみこまなければ宝は得られない。仏法、特に浄土の教えは難信の法と言われるけれども、ふみこみ、とびこんでしまえば、自ら道が開けるのである。人間を回復し、強靱にする道はこれ以外にない。

(佐藤良知)



寿塔開眼

浄土門主 岸 信 宏

私は十一歳の時に、和歌山県田辺市元町の浄恩寺に入り、藤田善信師に就て、得度教養を受け、県立田辺中学校を経て、今の大正大学の前身で、浄土宗の経営による宗教大学に入学し、予科二年、本科三年、研究院三年の学業をすました。研究院では唯識学を専攻し、時の学長であった大鹿愍成師の指導を受け、また大和法隆寺の佐伯定胤和上の唯識論の講義を一カ年間聴講しました。後、大正十二年より昭和八年まで十カ年間、浄土宗立の仏教専門学校（現在の仏教大学）と天台宗

立の天台宗西部大学で主として唯識学の講義をしていました。師匠の藤田老師が病気で法務を取ることができなくなったので、私は師籍のあとを嗣ぎ、浄恩寺の第二十世として法務に専念しました。時恰かも日華事変から太平洋戦争となり、第二次世界大戦争となり、昭和二十年の終戦までの十数年間の苦難の時代を自坊ですごしました。終に日本は戦争に敗れました。

戦後、日本は虚脱と混乱との苦悩の中に、あらゆる方面に自由と解放とが叫ばれ、我が

仏教界の中にも種々の混乱が起きました。浄土宗も二つの教団に分裂し、知恩院は浄土宗本派に属することとなりました。時の御門主であられた望月信享上人が昭和二十三年七月に遷化せられました。本派の初めての宗規の

かねて浄恩寺に於ては、この田舎の小寒利から一足とびに総本山知恩院の門主となられるようなことは再びないことであろうから、私の記念碑を建てたいという希望をもっていました。それと私の希望もあって、浄恩寺第



適用を受けて、不肖の私が門主に推戴せられ、知恩院の第八十三代の法統をつぐこととなりました。時に六十歳、爾来二十余年の歳

月が流れ、私も本年八十四歳の老齢を迎えました。余命もまたいくばくもないでしょう。

二十世としての私の亡きあとの墓碑を建ててもらふこととなったのであります。

塔は宝篋塔の形とすることとし、浄恩寺の現住石橋義宏師が石工宇津勇作氏と諸所を見学し、和歌山市真砂町報恩寺（日蓮宗）にあ

る紀州の藩祖徳川頼宣公の正室瑤林院様（加藤清正公の第五女）の墓碑宝篋印塔の形を取ることとし、その大きさは実物の半分とした。塔身の高さ二メートル二十センチ、奥行、間口共に一メートル九十二センチ、基礎の台石の高さ四十センチ、奥行、間口共に二メートル十センチあります。本堂の向拝（ごはい）の両側に青銅の阿弥陀如来の露仏が二体あります。向って右側のは丈六の座像、左側のは半丈六の座像であります。今度の私の寿塔は右側の丈六の座像の側にたてられ、ほぼその高さを同じくしています。塔身の中段の石には私が「量譽」と自署とした文字、下段の石には、私の漢詩の先生である高橋藍川師（田辺の近くの上富田町下鮎川の臨済宗成道寺住職）が百字以内の制限で私の「頌徳之文」を撰書して頂いたのが彫られてあります。

開眼の法要は本年二月六日午後一時から塔前で行われました。あいにく小雨でしたが天幕が朝から用意せられ、塔前の作法を終り、

次いで本堂で報告法要を行いました。この日は檀頭の脇村義太郎氏の内室信子様の満中陰の正當にあたりましたので、その法要を午前中に行いました。同氏の現在の住居は逗子にあります。本宅は田辺にありますので、帰省せられて午前中の内室の満中陰法要をすまされ、午後の私の寿塔の開眼法要にも参列して下さいました。脇村義太郎氏は東京大学経済学部の名譽教授で、昨年勲一等に叙せられています。同氏の舎弟脇村礼次郎氏も参列して下さいました。礼次郎氏は三菱銀行の重役を勤められ、鎌倉に住してられ、その御内室は正田家の出身で、美智子東宮妃殿下の伯母様に当たります。鎌倉のお寺で墓地を得たいとのことで、私が大仏で有名な高徳院（住職佐藤密雄師）に御紹介して承諾を得られました。舎兄義太郎氏の内室信子様の葬儀も高徳院で行われました。信子様の御病状がよくな、東京の聖路加病院に入院中に、すでに不起の覚悟もできられ、法名をつけてほしいと申し出られ、主人義太郎氏がわざわざ上洛せ

られ、私に夫婦の法名をつけてほしいとの御依頼があり、それを授与したのであります。信子様は法名を病床で見て、それを大変に喜ばれたということです。毎年脇村家御先代の永代祠堂の回向が知恩院で四月に行われますので、いつも御夫婦でそれにお参詣になりました。京都ホテルに前日おとまりになり、翌日晨朝のおつとめに参詣になつて御回向を依頼せられました。おつとめのあと、私の室で本山の精進の朝食を共にしたのであります。それを大変に喜んでいられたようです。本山での祠堂回向をすまされてから紀伊田辺の本宅に帰られ、浄恩寺でお祥月の法要を営まれたのであります。信子様は大正年間の末期に総理大臣となられた加藤高明海軍大將の姪に当り、加藤家の本宅は私の郷里愛知県中島郡平和町に隣接する祖父江町八開（はちかい）にあります。木曾川の東側にあり、私は宗教大学を卒業して研究院に在学当時、身体を悪くし、一ヶ年間休学をしたのであります。その時郷里の実家から、当時の八開

村の杉原という医院に通い、よく木曾川まで散歩をしました。この辺の木曾川の川幅は広く、常は白砂の中を清い水が流れて、その美しい眺めは今も忘れられません。信子様の百ヶ日の法要は三月二十九日の正當に知恩院で営まれることになっています。

寿塔開眼の報告法要を終り、堂内で投餅の興があり、座敷でささやかな祝宴が催されました。寺から案内して頂いた三十人程の知人が参列して頂きました。その中に田辺中学校を明治四十年に卒業した同期生の生き残り五人の内、桑畑、鈴木、下方の三氏が参列して頂いたのは嬉しいことでした。東京に在住の松岡氏は身体の工合も悪く欠席の旨の丁寧な手紙が桑畑氏の許によせられていました。

浄恩寺へ参りましたら、住職当時の総代の家や、特に親しくして頂いた家を訪問して、お内仏回向をすることを例にしていますので、翌七日午前中に七軒を訪問し、帰途、飛地境内にある浄恩寺歴代上人のお墓に参詣しました。師匠藤田善信老師は昭和十年二月八

日に遷化せられましたので、今日はちょうどその祥月逮夜に当ります。師匠の中陰中に咲き出た白木蓮が今回私の寿塔の傍らに移植せられました。思い出の深い木であります。

浄恩寺へ参りますと、最後の一夜は近くにある白浜温泉で過すのを例としていますので、夕方自動車で白浜へ参り、旅館川久に入りました。この旅館にとまりますのは今度で三回目です。この前の時の室に通されました。この室は昨年和歌山県がつとめました国民体育会に両陛下が御泊りになった御室で、室の様子は変わっていませんが、調度品が美しく整備されていきました。この室からは田辺湾内が眺められ、陛下が上陸せられて微生物を採集せられ畠島（はたけしま）や、亜熱帯植物の繁茂している神島（かみしま）が望まれます。その御案内を申し上げたのは田辺に在任の世界的博物学者南方熊楠先生でした。先生の蔵書類や龍大なる採集標本類を集めて展示する南方会館というのが白浜の番所山遊園地に建てられています。陛下が神島を眺め

て南方翁をしのばれた和歌が歌碑になって、会館の近くの神島を望む高台に建てられています。

八日の正午前に、昨日お内仏回向に訪問した御宅の人々を中心として七人の婦人達が見送りがたがた川久に訪ねて下され、屋上のロビーで会食をしました。ロビーの周囲には熱帯性の植物が鉢植にして列べられ皆美しい花をつけていました。午後二時過の白浜口駅始発の京都行の急行白浜号に乗りました。この列車は大阪行と京都行と名古屋行との混合列車であり、大阪行は和歌山駅で離れ、京都行は奈良駅で離れ午後八時京都駅につきました。

大君のとまりたまへるおん室に我れもと
まれり白浜の宿

遐齡八十尚輒全。（遐齡、八十、尚、輒全し）
寿塔造営欣浄縁。（寿塔造営す、欣浄の縁）
今日自修開眼式。（今日、自ら修す、開眼の式）

梅花馥郁紀南天。（梅花、馥郁たり、紀南の

天）（三月二十一日稿）



一作 家一

徳 義 木 八

私の『ふる里』

鉄所も製鋼所もそう大きな規模のものではなく、町の経済は主として奥地にある石狩炭田の石炭積出港としての役割りに依存していたようだ。

子供時代のわれわれの最大のたのしみは、港に外国船が入ってくることだった。そのニュースを耳にすると、われわれ悪童どもは学校の帰り示しあわせて五、六人ひとかたまりになり、家にはもどらずそのまま真ッすぐ港へいそぎ、その棧橋からいきなり海にとびこんで、沖合いの外国船へ競争で泳いで行く。そして高いタラップを上ると、くちぐちに「ブリーズ・ギブミー・カレライス」とか「ブリーズ・ギブミー・バタパンアンドジャムパン」とか怪しげな英語？を連発しては、青い眼の船員さんたちから、これらのものをたらふくごちそうになる——というのが、当時のわれわれの最大の愉しみの一つであった。そして、このカレライスとバタパンとジャムパンと、この三つのものこそがまた当時のわれわれ

私の故郷は北海道の室蘭という港町である。このムロランという地名は「高い所から降る」という意味のアイヌ語からきたもので、この原語通り、町には坂が多い。現在では人口約十八万、内浦湾にのぞんだ港のヘリに新日本製鉄、日本製鋼所、日本石油、富士セメントなどの大工場が軒をつらねて並んで、北海道随一の工業都市ということになっている。

しかし明治四十四年生れの私の子供じぶんは、この製

にとって「洋食」というものの代名詞であった。

ちなみに、わが室蘭市に喫茶店というものがはじめて出来たのは、私の中学四年生の時である。この時はじめて私はコーヒーというものを飲み、そして生まれてはじめて本格的な西洋音楽をレコードで聴くことができた。

文化的には不毛といっているほど貧しい土地柄であったが、その代り美しい自然にだけは豊かにめぐまれた。町の背後に測量山という二百米ほどの小さな山がある。

この山の頂上に立てば、市街と港が一望のもとに俯瞰され、西北には有珠山と昭和新山、そして空のよく晴れた日にはエゾ富士といわれる羊蹄山の秀麗な姿があざやかに浮かび上った。さらに西南には駒ヶ岳、北面には内浦湾を挟んで亀田半島の突端、恵山岬が青霞んで望まれた。そうしてこの小さな山は、子供時代のわれわれにとつては山ぶどうやこくわの宝庫であり、思春期の私にとつてはきわめてロマンティックな哲学的瞑想の唯一の場所であった。

一方、海といえば、この町を載せた絵鞆半島の太平洋沿岸は高さ三十米から百米におよぶ海蝕崖のつらなりで、その複雑に屈折した曲線の各所にハルカラモイ、マスイチ、オイネオシ、地球（チケウエー）岬、トツカリ

シヨ、イタンキなどとアイヌ名をもった奇勝が相次いでつらなり、これらが夏の絶好の遊び場所であった。

このふる里を捨てて、もう四十年になる。ふる里とは、その私にとっては、いよいよ幻に近いものになってゆくようである。

—滋賀県伊吹町在住—

前 田 繁 子

私のふる里は、滋賀と岐阜県境にある伊吹山麓であります。この山は標高一、三三七米の大草原で、雄然と青空に聳え、温容なる姿をしています。文化研究者は、この山を「古き神々と、もののふの山」といっている。又神の山、仏の山としてこの郷に住む人々にとつては、母なる山である。この山の山容を、朝な夕なに崇拜する心はいつしか、神のいぶきを産んだのであらうと、今も雲煙をたなびかせ、靈氣を吐き続けている。

この山神を解剖すれば、石灰岩を骨とし、沃壤を肉とす故に草樹に適し珍華異草多く伊吹葉草の名を博すといっている。然し、日本武尊は巨大な山神の神秘ないぶきにかかって高熱を発し間もなく、伊勢の「野蓑野」にて崩ぜられた、となっている。

山頂にはこの伊吹の神を一之宮、二合目には二之宮、麓には三之宮として祀られている。

仏の山としては平安初期に、山岳伽藍として開基した三修上人の参籠された霊窟がある。弥高百坊伊吹山百坊等が中腹から山麓にかけて群在していた。その証に四年前二合目近くで一銅鐘が発掘された。現在松尾寺に保管されている。又山の中腹西斜に大平護国寺の大伽藍があった。この地の住民十六戸全部が四、五年前大阪セメントの原石採掘鉱区であった為山麓に下山してしまった。円空仏の十一面観音像も共に移されて、現在大平寺館に安置されている。(台座共に二メートルある)

もののふの山としては、霧ヶ城跡がある。永和五、六年の頃京極高清の築いたもの、又元弘建武の頃、守長親王の幽棲、光厳帝、花園、後伏見上皇の行宮、尾崎之宮の本宮ともなり、近江の南朝方の根拠地等史跡が多い。

伊吹葉草については織田信長が外国種の葉草を移植さ

せて病に苦しむ者に与えたという伝説があり、今もその外国種が山中に生植している。民間薬、漢方薬、その他伊吹山独特種高山植物等数え切れない種類がある。この地に、伊吹陸貝、伊吹化石、伊吹山昆虫等もある。

以上伊吹について、大まかに私も未知の数々を探究して、ほんの一部を綴らせていただきました。さて登山するには、関ヶ原から頂上迄下ライブウエーで登るのと、東海道線近江長岡駅で下車バスで登山口まで十五分、この山麓から徒歩で、三之宮前を林道、又はリフトで三合目迄利用してもよいが一合目、二合目に史跡もあり、旅館十四、五軒あつてスキーの頃は一合目から良いスキー場があり、三合目には高原ホテル植物園等がある。

頂上には弥勒堂、測候所日本武尊、伝説跡等がある。驚嘆するのは大自然美の大花園である。すばらしいというのはこのことをいうのではないかしらと思う。山小屋も五軒あつて朝の御来光拝すにも休憩するにも便利である。こうした自然美も、産業開発、観光開発等によって破壊されて行くのが淋しい。でも先頃「伊吹山を守る会」が発足されたので嬉しいことである。又去る五日、当町の句会で「伊吹山東と西から石を食い」の名句が生れました。



私学経営者の半生

桐生市・明照学園
樹徳高等学校長

野 口 健 策

今日も朝礼で、千七百の全校生に「生かされる喜び」とは何かを話して部屋にもどって来た。

毎年の事であるが、新入生も五月ともなると新学期の緊張にもゆるみが出て来る。若い高校生を、おあずかりする、私どもにとってこの時機は非常に大切な時であり、特に指導監督を充分配慮しないと、年間の目標をくるわせてしまう大切な時である。こんな事を二十年あまりつづけて来た私である。

私の勤めさせていただいている学校は、先代野口周善先生の創立になる、明照学園樹徳高等学校で、只今生徒数約一七〇〇名、職員八〇名が仏教主義により、一家の如く日夜努力を傾けて居ることは誠に有難いことであります。もともとこんな学校であったのか、多くの人々

の縁に結ばれ、今日こうして、地域の布教教化に多少なりとも貢献出来るのは関係者の各々が仏教精神に徹して居ったからであります。それでは職員に僧侶の数が多いのか。浄土宗の僧侶は、私を含めて二名しか居りません。けれども八〇余名の関係者が皆仏教的な考え方に徹して居る点は誠にみことなものがあります。

昭和二十年九月この学校に若い教師が赴任して来た。筋骨たくましい、元海軍予備士官である。女子生徒ばかりの学校の中でこの教師はたちまち生徒の話題をうばってしまった。

父が校長であり、長兄が教頭、妹も教鞭をとって居る中に、デモシカ先生として、のんきに若さを謳歌して居ればよかったが、間もなくそれがゆるさなくなった。

先づ大水害に学校が見舞われた。その当時私はすでに現住の大善寺住職となつて居り、教鞭をとるかたわら時間を見ては畠を耕作し、村の青年を集め柔道を教え、仏教会の仕事を手伝い、又家庭教師をして居ったが、こんな事をして居つても戦後の生活は少しも楽にならなかった。

こんな時学校が水害で流され、私の生き方も又一変したといえる。

流された学校の整理は九月から十一月迄かかったと思う。父は老い、兄は病に倒れ次兄は高崎の寺に居った。二十六歳位の私にはどうすることも出来ない。学校の経営は日々に傾いていった。長い間入院生活をして居った兄はついに他界した。父は益々氣力を失つていった。桐生の人々は誰もが、学校は再建出来ないと思う様になった。職員は一人去り、二人去り、組合は色々と要求する様になった。中には学校を市立校と合併する運動すら起つて来た。そんな時私は相生町で教育委員に立候補した。二十七歳であつたと思うが幸に良い成績で当選した。その年父の死に遭遇した。先に長兄を失い次いで父を失い、次兄は外部の人となつて居る。父の死により社会的つながりも一応切れたと考えられる。父の葬儀は偉

大な父としてはあまりにさびしかった事が今尚くやまれてならない。

何をなすべきか、そのすべを知らないまま只天の意志に、仏の加護によるより道はなかった。

次兄と相談して次兄に浄運寺を見てもらい私は学校を守ることにした。ここに二十七歳の校長が生れたのです。二十七歳は全国でも一番若く一番学識のない校長であつたと思います。随つてその後の運営が思う様にならぬのも当然であります。その責任は若い校長が、理事長が負わねばならぬ事になったのです。生徒の数は年々に減少し、最も少い時は一二〇名位であつたと思います。

勿論これで経営が賄い切れるものでありません。私はそこで考えた。やはり我を捨てた生活でなければならぬ。それから一切家の事は考えない事にした。只々学校は何とかせねばならないと。

私の月給はその時から五カ年間計上しない事にした。毎日の食物といへば、さつまいもだけだった。家庭には妻と子供が居り、妻は病弱であつたが、目をつぶつて見ないこと、聞かない事にした。目が売れるものなら片目を売つて学校の財政に当てたいと思つたのもその頃の事

である。

只僧侶としての仕事、人権擁護委員、保護司、BBS、仏教会の他事は水をのんでもつとめて行こう。

只家族に対しては申わけない事をしたと思つて居るが、当時としては何とも出来なかった。私は一人前ではないのだから家庭を持つことがあやまりであったのかも知れない。家族を放置した生活が始つた。出家とはこんなものかなと、その時気が付いた。

放置された家族は、妻の実家の助力によって何とか生きて居つた。にもかかわらず病弱の妻は事ある毎に私をかばい、校長として又寺院住職としての体面だけは保てる様に心掛けてくれた。この時妻が私をすてて居つたら現在の私は無かつたと思うし、又子供達がこうしますしさにたえてくれなかつたら、私は人生の落伍者となつていたと思う。

一方社会に飛出すと二十七歳の若僧は誰も相手にしてくれない。面と向つて悪口をいい、お前の学校は俺がその内に買収してしまふなどという他の私学人も出て来た。現実のきびしさをいやという程味わいされた。止みなくその後は只、さざえが、カラにもぐつたような生活となつた。やがて十年の年月が流れ、人心も落着き生活

も豊になった。然し精神文化の面は戦後そのままでも何の変化も起らず一度放棄した心の問題はついに借日のおもかげもなく、今日に至り急に人々をあわてさせている。

私が只今の信仰生活に入れたのは、十五年ほど前、第一回の心臓発作で倒れた頃からである。その後一進一退の病状のうちで、私は何のために生れて来たのか、若い身そらでなぜ病の床に身を横たえて居らねばならぬのか。

苦心の末、生活だけは何とか支えられるようになったのに、病床生活を送らねばならないのか。今命がなくなつたら、仕事はどうなる。一〇〇名余の学校関係者はどうなる。一八〇〇名の生徒は、私の家族は、死にたくない、あせればあせる程、いたたまれぬ感情に追いまかれ、夜もねむれぬ日が多かつた。僧侶として誠にはずかしい事です、自己の死をおそれ運命をのろつたものです。

命は宇宙の意志によって与えられたものである。あせつてもどうにもならぬ、私の肉体が必要とあれば、仏は、私を生かして置く、この世に役立たぬ存在になれば、私はわが命をめしあげる。只今生きているその事が尊い有難い事で、この間に社会の為人の為に働く事が、人生の意義であり、そうする事により、私達はたとえ肉体はほろんでも求遠の生命を得るものである。まして私

は、ヘッポコなりとも僧侶であり又教育の一端になつてゐる。私の言行は多くの子弟にうけつがれ、次ぎ次ぎと永遠に生きるのだ。こんな有難い事はない。生ある限りこの道に精進しよう。

それにしても、能力も学識も、まして政治的手腕等皆無であり、加えて人一倍物ぐさな私である。いや能力はあるがまま、学識もあるがままに、それでよいではないか。その能力その学識で最善をつくせば、良いも悪いもない。そのうちに必ず良き協力者が得られる事であらう。

只今学校も寺院も良き協力者を得て軌道の上をあゆんでいる。勿論いつまでもこのままであるとは思っていない。けれども只今、私の力によつたものはどちらにもない。すべて因縁によつてゐる。先代の力も大きい、面と向つて悪口をいつてくれた人も、今考えれば弱い私に、なにくそ、今に見る、という気概を与えてくれた。良きにつけ悪しきにつけ、他の人々の力と好意によつて支えられてゐるのである。

自己が救えなくなつた時、幸福は周囲のもろもろの力により、先方より来り与えられるものである事を痛感しつつ失礼いたします。

表紙の解説

東京都墨田区 回 向 院

回向院は今から三百余年前、明暦三年正月に江戸八百八町を一時のうちに灰燼に帰した「振袖火事」による犠牲者の十万八千余の霊を葬るために建立され、四代將軍家綱が老中松平伊豆守の意見を取入れ、遵誓大僧正に命じて、貴賤の別なく死者を合葬して江戸市民と共に惨死者の冥福を祈るため、現在地（當時の本所牛島新田）に二町四方の土地を下付されたのが起源である。

その後も江戸における明暦の大火後の最大の災害であつた、安政二年十二月二日の大地震の死者二万五千余霊を合葬、年々の隅田川の大洪水で漂流してきた水死者、江戸府内の無縁仏、牢病死者などが葬られ、近くには大正十二年の関東大震災の際の各区にわたる死者十万余人の分骨も納骨されてゐる。

このように同院は、江戸から東京へと歴史の変遷と共に人々の生活の中に生きてきたのであるが、境内にはこれらを物語る様々な記念碑が祀られてゐる。明暦三年の大火焼死者石塔・安政二年の大震災火災石塔（三基）・鼠小僧次郎吉の墓・水子塚・力塚などがそれである。この外、竹本義太夫・加藤千陰（橘千陰）・岩瀬京伝（山東京伝）京山兄弟の墓などがある。こうして都民の祖先数十万の精霊をまつる同院は、現在新時代に適応した近代的な本堂の建設工事が進められてゐる。

第十五回「浄土文化講座」より



生 と 死

大正大学教授・医博 佐竹 隆三

「生と死」——このように大きなタイトルを頂きましてどのように料理できるかどうかわかりませんが、ご紹介頂きましたように、一応私は心理学とか精神医学を専攻しておりますので、こういう立場から本日は考えてみたいと思います。

まず、「生と死」ということを話す前に、生と死ということの概念規定から話してみます。一般に、生きているものすなわち生というものは、死んでしまったものすなわち死というものとは対立概念を形成するものであり、論理的に言えば、生と死は対をなす相対概念であります。しかしよく考えてみますと、生の終りというものが命が尽きた死であり、

そこから死が始まるということでもありますから、これは対立概念というよりも、あらゆる瞬間において、生の中に常に死のモメントが含まれているわけです。そうしますと、生と死というものは、常識的には相対概念ではありますが、場合によっては生は常に死を含んでいる包摂概念でもあるわけです。これは多少矛盾するようでもあります。生と死というものはこのように奇妙に係わり合っているものなのです。また、生というものはそう簡単には死なないという安らぎの中にあるものですが、逆にいつ死ぬかわからないという将来における非常な不確定性も持っているのです。

ところで生という場合は、広義の意味で、生きとし生ける生物全体の共通要因として考えることもできますが、本日は、人間的にすなわち人間存在としての人間として生きるということについて話を進めてみたいと思います。現に私達はこうして人間として生まれて来たわけですが、この人間として生まれる、生きる、そして死ぬということはどういうことなのでしょう。もう一度素直な気持ちになって静かに振り返ってみる必要があるかと思っています。

まず第一の人間として生まれるということはどんなことでしょうか。生まれるということはあくまでも未文化な状態でありまうし、意識として捉えられるものではないわけです。それでは人間として死ぬということとはどうかといえますと、私達意識心理学的なレベルからいっても、自分の死というものは全く経験できないものなのです。従って、生まれるということも、死ぬということも、実際には自覚できないものなのです。ですから、主観的な心理学的な表現をとりますと、生まれることと死ぬことは私にはないのです。ただ、あるのは人間として生きている事実が体験としてのみ理解されるわけです。従

って、スタートの生まれるという時点もゴールの死ぬという場面も、自分では意識できないものですから、そういう意味で、私は空海の言葉が思い出されるのです。

「生まれ、生まれ、生まれ、生まれて生のはじめに
くらく、死に、死に、死に、死にて死のおわりにくらし」

大変非情な言葉ですが、人間存在というものは生まれた時死ぬ時は本人にはわからないものであり、ただ生きている現在だけが意識できるわけです。

さて、人間が生きて行くという生き方については人さまさまなのですが、もう少し基本的な人間として生きるという生について焦点を絞って行きますと、人間の生というものは死との関連においていずれば死すべき存在なのですが、厳密にいきますと刻々に死に近づきつつある存在なのです。生は死へと旅する存在なのです。言い換えますと、生は時間性とか歴史性というものの、もとに帰るべき術のないものを根本に含んでいるのです。

ここで時間という大変難しいものを出しましたが、この時間の構造について少し触れてみたいと思

います。時間とは無限の過去から無限の未来に向って直線的に刻々と過ぎ行くものです。これは歴史的な時間と普通呼んでおりまして、人間がこの歴史的時間の中に生きていることは疑う余地のないことではありますが、ところが人間の場合はそういう歴史的時間の他に体験時間というものがあります。どういうことかと申しますと、楽しい時間というものは疾走します。大変短かく感じます。反対に、苦しい、悲しい時間は非常に遅く感じます。客観的、物理的には同じ時間であっても、本人の置かれたシチュエーションによって時の歩みの感じ方が違って来る時間のあり方を体験時間と呼びます。もう一つ、時間の構造には物理的時間がございます。東京から新大阪までひかり号で三時間十分で行ける。この場合の三時間十分が物理的時間であります。陸上の百メートルの世界記録が今度九秒九になった、これも物理的時間であります。

従来、時間構造につきましては、ドイツの精神医学者のボーマンとかグリュンバウンとかが、体験時間をクロノグノージー、歴史的時間をクロノワジ、そして物理的時間をクロノメトリーというよう

に指摘して整理しております。しかし私は、ここに更に周期的時間というものを提示したいと思ひます。一日の二十四時間とか、一週間とか、一年十二月とか月というような時間構造であります。人為的なものでは、やはり春夏秋冬の移り変わりから来るお祭り、あるいは祝いごと、宗教上の儀礼習慣にまつわる年中行事、これら周期的時間についてもあらためて考え直す必要があるかと思ひます。このことは、生きるという日常生活において一つの区切りをつけるといふ重要な意味を持っています。

いささか横道にそれましたが、人間と時間性というものを考えた場合、先程述べましたように、死に刻々に近づきつつあるというのが生の本質ではありますが、あまり死というものを意識しますと未来が暗く憂鬱になりますので、現在並びにそれに続くもう少し先の将来に焦点を合せて考えてみたいと思ひます。そうしますと、人間とは未来的な存在であると定義できると思ひます。すなわち、限られた未来ではありますが、しかし自己にとっては開かれた自由な未来が待っているわけです。こういうことをいっているのは、フランスのキリスト教の実存哲学

者の一人であるガブリエル・マルセルで、*disponibilité* という言葉で表現しています。ドイツ語では *verfügbarkeit* といひまして、直訳すれば、処分（処理）可能性ということです。例えば、A という人間にとって、A の人生というものは A が自由に処置してかまわない、A 自身に任されている、ということです。マルセルがこのようにいっていることは非常に意味のあることです。

御承知のように、ハイデッカーをはじめとする実存主義の人々は、決意とか決断とかを強調します。人間がこの矛盾に満ちた社会の中で生きて行く上には、楽しいことよりもむしろ悲しいこと苦しいこと、つまり苦慮が多く、こうした場面に際し、主体である自己が負けることなしに困難や苦境をはらいのけて行かなくてはならない、そうでないと実存のごまかしとなる、というわけで主体的な決意や決断を殊更に重大視するわけです。しかしながら、一つの道を決断するためには、他の道を捨て去らなければならないわけです。すなわち、無限の自由の中からあらゆる可能性を閉鎖してしまうわけです。いわば、実存主義の一つの欠点は、決断を強調するあま

りに閉鎖性の落し穴の中にみずから落ち込んでいるのではないのでしょうか。あまりに性急に決意や決断をいい過ぎるのではないのでしょうか。しかし、私達の人生には、右か左か、あれかこれかの決定をしばらく静かに考えてみる場合もあるのではないのでしょうか。態度を保留にして、立ち止まって考慮する余裕が必要かと思ひます。この落ち着きと安らぎを含んだ冷静さが、マルセルのいう *disponibilité* ではないのでしょうか。そして、仏教でいう無明の境地もこうした心境のこのようなことです。

従つて、人間の生ということは本来は未来に向けて開かれた存在であるということを先程申しましたが、このところを考へてみますと、私達が何か意欲あるいは意志を持つということ、また近い将来に向けて私達が願望を投げかけるということ、すなわち意志としての自我は人間の生における時間ということでもあるわけです。

さて、先程来「生と死」ということについてとりとめのめい話を述べて来たわけですが、一つだけ伏せておいたファクターに病氣ということがございします。恐らく皆様方には病氣というものはマイナスの

価値のあるものですが、しかし実際の日常生活における人間の生きる営みにおいて、病気というものは絶対に避けられぬべき、いわば好もしからざる必然的な同伴者であるわけです。としますと、病気というものはイヤなものだ、病気から逃れたいなどというネガティブな考え方はいかなるものでしょうか。いささか疑問にも思えるわけです。折角、いつまでも病気につきまとわれるものならば、病気を好きになつたらどうでしょう。これはちょっといい過ぎかもしれませんが、本当の意味での健康を知る上にも、あるいは病気にかかつて否や応なしに休息をとらなければならぬ——そこで普段は忙しくて考えてもいなかった本当の自分自身とめぐり会う、そうした機会があると思われまふ。

従来、病気というものはすべてマイナスの価値、ネガティブな受け取り方をされています。これは当然のことで実際イヤなものではありませんが、そのマイナスを上回るような自己客観視を得たならば、肉体の病いというものは精神の治癒に働く妙薬としてのなしわざがあると考えらば、病気というものの価値も全く百八十度転換して来るといふもので

す。事実、自分が死ぬかもしれないという生死の危機を感じるような難病にかかつて、それを克服できた人などは、日頃病気になど一度もかかったことがないと健康を誇示するような人に比べますと、はるかに精神的に深みがあるようです。すなわち、病気にさえかかれない人は、人間的には片端なのではないでしょうか。病気にかからないのは人間としては恥なのかもしれません。もちろん、薬や治療法もない不治の難病や伝染病などという重い病気は論外としておきます。ちょっととした風邪や不眠症などというものは、正に神の思し召した自然の妙薬とでもいうことでしょう。

かように申してまいりましたが、時間の方も大切迫して来たようです。全くもって、このとりとめもない話をどうまとめたらいのかわかりませんが、最後に一言申して、このふつつかなお話を終りにしたいと思います。——それは、結局、人間存在として生まれ、生き、死んで行く人間的生というものは、自己みずからの内なる闇の世界をじつと視つめて生きる、そういう存在なのではないのでしょうか。

(文責・編集部)



一紙小消息

△第二回▽

職住寺觀音市四日

岸 覺 勇

(六) 十方に浄土おほけれど西方を願ふは十惡五逆の衆生の生るる故なり

十方に浄土おほけれどとは、觀經に説く如く、韋提希夫人がわが子の阿闍世太子のために、七重の深宮に幽閉せられた時、遙に耆闍崛山に在す釈尊に向つて弟子の目連阿難の説法を乞うたところ、釈尊は自ら目連を左に、阿難を右に従えて韋提希の前に來現せられた。時に韋提は我に憂惱なき処を説き玉え、清浄業の処を觀ぜしめ玉えと願うに、釈尊は眉間より光を放つて十方諸仏の浄土を現じ玉うた。時に韋提は十方浄土は皆清浄にして光明ありと雖も、我れは極樂世界の阿彌陀仏の所に生れんことを願うといったという。

これに依ると、浄土にも十方浄土と多くの浄土があること

が知られるのである。

次に十惡五逆とは、十惡とは身三（殺生、偷盜、邪婬）、口四（妄語、綺語、惡口、兩舌）、意三（貪欲、瞋恚、愚痴）の十種の惡をいい、五逆とは父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、仏身より血を出し、和合僧を破るの五種の逆罪をいうのであるが、ともに惡中の惡の極惡罪である。

かかる十惡五逆を犯した衆生の浄土往生を説いたのは、一代仏教中觀經下下品のみである。乃ち下下品には「五逆十惡の惡人も臨終に善知識に遇い、十声称仏すれば金蓮華の日輪の如くなるを見て、一念の頃に西方極樂世界に往生す」とある。

されば浄土は十方浄土と沢山あるけれども、十惡五逆の衆

生の生れることの出来るのは、西方極楽だけであるから、われら凡夫も西方極楽を願うというのである。

(七) 諸仏の中に弥陀に帰し奉るは、三念五念に至るまで、みづから来迎し給う故なり

とは、この中前句は十方三世の諸仏は皆悉く衆生無辺誓願度の願に酬いて、衆生を利益し給うのであるが、それらの諸仏に帰依せず、独り阿弥陀仏に帰し奉るのは、という意である。

後句の「三念五念に至るまで、みづから来迎し給ふ」とは、善導大師の法事讃卷下に「種々の法門皆解脱すれども、念仏して西方に往くに過ぎたるはなし、上み一形を尽くし十念に至り、三念五念まで仏来迎し給う」といえるに依られたものであらう。

思うにこの一文は、念仏行者が往生する臨終に阿弥陀仏が来迎し給うという、臨終来迎のことを説かれたものであるが、その臨終来迎のことは、四十八願中の第十九願に「寿終の時に臨んで、もし大衆の為に圍繞せられて、その人の前に現れずんば正覚を取らじ」と誓われている。そこで第十八願に乗じて念仏往生する者は、必ずこの第十九願に依って臨終に阿弥陀仏観音勢至等の来迎を得るのである。

さればわれらが十方諸仏ある中で独り阿弥陀仏に帰依する

のは、阿弥陀仏は最後臨終に僅か三念五念の念仏した者にまで、来迎し玉うからであるというのである。

(八) 諸行の中に念仏を用ゆるは、かの仏の本願なる故なり

とは、善導大師の観經散善義によれば、一代仏教を正行と雑行とに分ち、正行にも読誦、觀察、禮拜、称名、讚歎供養の五あり、その中第四の称名正行を本願正定業と判ぜられて、念仏を阿弥陀仏の本願の行とせられているので、偏依善導の法然上人はこの判釈によられて、かくいわれたのであらう。

なぜ念仏を本願とせられたかについては、善導大師は往生礼讃に「大聖悲憫して直ちに勧めて専ら名字を称せしむ、正しく称名易きに由るが故に」といって、称名は修し易いからだとせられている。また法然上人は選択集に善導の易の義の外に、更に勝の義を挙げていられる。即ち「念仏の勝るとは、名号は是れ万徳の所帰なり。然れば則ち弥陀一仏の所有る四智三身十力四無畏等の一切の内証の功德、相好光明說法利生等の一切の外用の功德、皆悉く阿弥陀仏の名号の中に摂在せり。故に名号の功德を最も勝ると為すなり。余行は然らず、各に一隅を守る、是を以て劣となすなり。」といっているのがそれである。

即ち阿弥陀仏が念仏を本願とせられた理由について、善導大師は称名は易いからといい、法然上人は更に勝れているか

からだと説明せられてゐる。

ともあれ我等凡夫が念仏を唱うるのは、弥陀の本願であるからだといふのである。

伽いま弥陀の本願に乗じて往生しなみに願として成ぜずといふ事あるべからず

とは、善導大師が観經玄義分に「今時善惡の凡夫同じく九品にうるほい、信を生じて疑いなく仏の願力に乗じて、悉く生ずることを得るなり」といい、また「上は一形を尽くし下は十念に至り、仏の願力を以て皆往かざるなし」といっていられるのに、依られたのであらう。

されば現代の善惡の凡夫、また平生よりお念仏している人も、臨終に始めて念仏した人も、凡べて弥陀の本願力に乗托すれば往生出来ぬといふことはないといふのである。

㊦ 本願に乗することは信心の深きによるべし

とは、本願に乗托すればいかなる人も往生せぬ人はないが、その本願に乗托するには信心を深くせねばならぬとの意である。

この句は善導大師が観經散善義に、觀經に説く三心の中の深心を積する下で「決定して深く彼の阿彌陀仏の四十八願を以て衆生を摂受し玉うことを信じて、疑いなく慮なければ、彼の願力に乗じて定んで往生を得ん」といっていられるの

で、それに基いてかくいわれたのであらう。

㊦ うけがたき人身をうけて

とは、生れ難い人間に生れての意であるが、これは雜阿含經に「一時世尊爪甲に土を載せて大衆にの玉うに、汝等我が爪上の土多しとせんや、大地の土を多しとせんやと。諸比丘答えていわく、爪上の土は甚少く、大地の土は至って多しと。

世尊諸比丘に告げ玉わく、人道を得る者は爪上の土の如く少く、非人に墮する者は大地の土の如く多し」といって、人間に生れる者は極少なることを説き、また他の諸經にも、或は人に生れることを優曇華にたとえ、或は盲いたる龜の浮木に遇えるにたとえ、人間に生れ難きことを説いているので、それ等の經意に依られて、いわれたのであらう。

㊦ あひがたき本願にあひて

「無上甚深微妙の法は百千万劫を経ても遇い難し」という如く、尊いみ法に遇うことは容易なことではない。まして阿彌陀仏の弘誓の本願に遇うことは難中の難事なのに、今幸に遇うことが出来て、との意である。

㊦ おこしがたき道心を発して

この五濁惡世の娑婆世界に於て「穢土を厭うて淨土に生れたい」という道心を発することは仲々困難なのに、ともかく今その道心を発することが出来て、との意である。



異僧「眞覚」

第五回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

年が明けて安永九年（一七八〇）正月十五日。清八は治兵衛に伴われて万福寺の門を潜った。院主の竟空は三十六歳。

顴骨の張った頬に切れの長い眼が鋭どかった。背も見上げる程高く、清八は威圧に似たものを感じて小さくなった。然し外貌と異り、院主は意外にやさしかった。

「清八か。お前は今日からうちの小僧じゃがうちには息子がおる。二人も小僧は要らぬことじゃが、いろいろ世話になるとる治兵衛さんの頼みじゃから一応預かることにした。ところでお前は何か得手じゃ？」

清八は叱られはしないかと内心びくつきながらそれでも正直に、

「わしは粘土で牛や馬や人形を作ったり、竹トンボや独楽を

作ったりするのが好きです」

うまく言えないままに答えた。

「ああそうじゃ。いつか新福寺さんから聞いたことがあるわい。そんならお経の稽古や掃除の合間には好きな事をせい。むかし木食上人という坊さんは随分とすぐれた彫り物をされたと聞いておる。好きな道にはげんでみい。ものになるかもしれぬ」

どんなに苦しい修行を課せられるのかと内心の不安は取り除かれて、彼は胸をなでおろした。

寺は南大萱の村の程に小高い地形を占めて北向きに建っている。本堂の正面三十歩程の処に門。その右が鐘楼である。門と鐘楼の向うに村の不規則な屋並みが湖辺まで続いて

いる。一衣帯水の語そのままに琵琶の湖が横たわり、左手の比叡の峰から比良へと続く連峯が真っ白く雪を頂いて可成り鋭い稜線で空を限っている。その稜線から幾筋かの深い谷が一気に湖に落ちていくのが澄んだ空気の中で手にとるように見える。和尚の誘いで彼は和尚と並んで本堂の椽に腰をおろしていた。

「おい、あの左手の高い山、あの山は何ちう山か知ってるか？」

「比叡山どす」

「そや、比叡山ちうのはどういいう山じゃ」



彼は答えられない。

「比叡山というのはな、昔から偉い坊さんが修行をされた山じゃ。真宗の御開山の真鸞様もあの山で修行なさったのじゃ」

「御院主さんもう？」

彼は訊いた。

「いや」

と、一寸詰まってから、

「俺は二三度お詣りはしたが、修行はせなんだ。……そうじゃ」

と和尚は思い出したように言った。

「お前も寺に入って清八ではおかしいのう。何かよい名前を考えてやろう。うん……今真鸞聖人の事を言うたが、一つ聖人様にあやかかって……そうじゃ、真覚、真覚がよい、真覚とせい、真鸞様のように偉い坊様になる覚悟で修行せよということや。どうじゃ、よい名前じやろう。ちと良すぎるかな？ いや、まあええ。真覚。真覚じゃ」

院主は掌を打って家族を呼ぶと妻と息子の竟山に、彼と、今名付けたばかりの彼の僧名を披露した。娘のしのぶは未だ九歳で、母親のうしろから、ズングリ丸い真覚を、ただ珍しげにながめていた。その日の中に和尚の手で髪が剃られ、丸

々とした青い頭が誕生した。

寺の朝は早い、院主と真覚は本堂の掃除。寺の家族は庫裡と庭と分担を決めて半刻（一時間）。それが済む頃漸く朝の陽が昇った。

「お前は何宗の坊さんになるわ判らぬが、この寺に在る間は真宗のお経を稽古せねばならん」

そう言つて和尚は早速、朝の勤行を兼ねて正信偈と阿弥陀經の稽古を始めた。漢字といへば寺小屋の頃習つた孝經の素読以外に知らぬ真覚はすっかり弱つた。まどろっこしい彼の習得を、院主は少しも苦にせぬ様子で、毎日同じ箇所を繰り返し繰り返し読んでくれた。その心やりが有難く、真覚は暇をみつけては本堂の椽で練習を重ねた。

進歩のおそい彼も、田一面に菜の花と紫雲英が咲き乱れる頃になると、經本を頼りにどうにか院主について読誦することが出来るようになった。比良の谷間の雪溪も次第に細つて、山も湖も模糊として霞につつまれ、その霞の中から雲雀の聲が落ちて来る。湖の岸辺の繁みや真狐の中を鮒が泳ぎ廻り、モロコが群れる季節である。矢も盾もたまらなくなつた真覚は、隣家の半兵衛に声を掛けて、軒先に立てかけてあつた釣竿と魚籠を借りると浜辺に急いだ。ミミズは途中あちこちにある堆肥場でいくらでも掘ることができた。白衣を着て

釣する彼の姿は何か似つかないものを感じさせたが、そんな事に頓着ない彼は、小さな時から馴れ切っているモロコ釣りに夢中であつた。面白いほど釣れた。魚籠に半分も釣つたかな？と中を覗き込んだ時、

「やあ！ 清八やないか」

突然背後から大きな声が降つて来た。

その声の主が太吉であることは振り向くまでもなかつた。

「永いこと逢はんんだな」

多少の懐しさをもつたその声は、すぐ意地の悪い響に変わった。

「どや、ちいとはお経が読めるようになったかい？」

それは問いではなく楡擲であつた。彼は返事をしなかつた。

「そやそや、お前もう清八やのうて真覚とか言うのやてなあ。名前だけは偉そうやのう。けど、名前だけ坊主になつても、やっぱりお前は清八やわい」

真覚はハッと振り返つた。

「そやら、坊主は殺生したらあかんのとちがうか？ その坊主が魚釣りしとるのは一体どういふこっちゃ」

真覚は愕然とした。何時か院主に五戒ということを教えられた。他人事のように聞き流していたそれを、今太吉の言葉

で思い出したのである。

『〇生きものを殺してはいけない』

〇他人の物を盗^{ぬす}ってはならぬ

〇淫^{ひよ}らなことをしてはならぬ

〇嘘をつくな

〇酒を飲んでではならぬ

此の五つの戒めが仏の道を歩むものの心掛けじや。まして坊さんはこれを犯してはならぬ。』

和尚の言葉の頭の中で繰り返した彼は、やにわに立ち上ると、釣り竿をバシッとへし折り水にたたきつけた。魚籠の魚をザザッと水に返すと、これも沖を目がけて放り投げた。動揺した彼は、それが半兵衛の借り物であることをすっかり忘れてしまっていた。

寺に帰った彼は、境内の草むしりをしていた院主の前にベタリと掌をついた。訥々として語る彼の懺悔を聞いた院主は、

「よしよし」

と、頗る機嫌よく言った。

「間違った事をして、改めればそれでよいのじや。一人前の和尚でも、戒を犯して平気なのがおる。そんな坊主よりお前の方がずんと立派じや。その心掛けを忘れるなよ。そうす

ればお前はきつと偉い坊様になれるぞ。それにお前は、今日殺生戒を犯したか知らぬが、もう一つの妄語戒を守った訳じや。妄語戒とは嘘をつかぬことと教えたが、それはもつとつきつめると、ごまかしたり、隠しだてをせぬことじや。お前は殺生戒を犯したことを俺に告げることで、妄語戒を立派に守ったことになる。よかった、よかった。これも阿弥陀様のお守りがあればこそじや。さあ。本堂の如来様にお礼を申し上げてこい。」

和尚は上機嫌でそう言った。

おわび

●先月号の送付が大変遅れましたのは、表紙関係の印刷ミスで、二度刷りしたため、またこのために裁断の関係でサイズがやや小さくなっていました。かさねておわびいたします。

●二月号掲載の「沖繩の仏教事情」の中、五頁中段で「京都の檀王法林寺から派遣された小池さん……戦後亡くなったおられます」とありますのは、袋中寺が戦後廃寺となったのであり、小池さんは生存いたしておられます。編集部のミスのため小池さんならびに講師に多大なるご迷惑をおかけいたしましたこと、深謝いたします。



百万べん念仏

三田全信

一 おこり

百万べん念仏といえは京都の京都大学裏の本山を思い浮べる。筆者も山内の一院で学生時代を過ごした。懐しい想出が一杯ある。松林がとてもなつかしい。中学五年の腕白盛の頃秋に発火演習というのがあった。軍隊の払下げの銃を持って軍事訓練をさせられるのである。演習の前夜銃を持ち帰って、空弾をブツ放って隣の和尚さんを驚かせたこともあった。法兄弟が交番で炊事と掃除をするのである。虎毛三色めしを炊く奴もいた。シジミ飯

という風流に聞えるが麦飯のことである。ヤレコンということが仲間の問題になった。法弟だが市場へ魚を買いに行った。売男がいつも慣れた淡い声でヤレコンヤレコンと売立てている。これ幾らだといっても聞えない。気の早い法弟はそのまま失敬して帰った。これからわれわれ仲間とその法弟をヤレコンとあだ名を奉った。

百万べんといえは知恩寺を連想するが、起源は印度ナンダ国王ハルリという人が自国には毎年盗賊に侵害されて五穀の値が上る。そればかりでなく流行病さえあって人民が非常に困窮するので、何かよい救済法はないものかと釈尊にお尋ねしたところ、釈尊は椋の実百八をつな

いで常に持つて仏法僧の名を唱えること十遍、二十遍さ
らに百万遍を唱えたならば、百八の煩惱(心のわづらい)
をのがれ、とりの世界に入ることが出来るとおさとしに
なった。王はこのことばを信じて一族家臣にまでこの数
珠をもたせ一心に念じたところ現益を得たと経にある。

これは現代的に考えて何を意味するかというと、一心
に三宝(仏と法と僧)の名を唱えることは心を專注するこ
とである。一族家臣までもが心を一つのものに專注する
ということは、目に見えない精神力の集積である。だか
ら外敵に対しても堅固な防禦力となったであらうし一族
家臣には強い結束力となったであらう。この印度の百万
遍念仏が中国に伝わって、これをひろめられたのは道綽
禪師である。道綽禪師は善導大師の師匠になる方である
が、熱心な念仏者で、念仏をひろめるために、子供を集
めてお金を与えられたという。子供達はそれが嬉しくて
ついに大人になってほんとうの念仏者になったというか
らその着想力は偉大なものである。その道綽禪師が、印
度の仏法僧の三宝の名を唱えよという在り方に対して仏
の名殊に阿弥陀仏の名を唱えることにしほられたのであ
る。道綽禪師のお弟子に道生という人がいたが、この人
は師説を信じて百万遍念仏をなしとげて大往生をとげた

と伝記にある。この中国における百万べん念仏が日本へ
伝わると、非常に盛んになったのである。

二 年中行事になった念仏

百万べん念仏が、日本へ伝わると、はじめは真面目に
百万べんの数を読みとっていた。三条天皇の研子中宮や
その兄の宇治平等院の鳳凰堂を建てた藤原頼道なども熱
心な百万べん念仏の信者であった。法然上人も百万べん
念仏は功德が多いとおすすめている。その頃後白
河法皇や法然上人の帰依者九条兼実であるとか、東大寺
を再建した俊乗坊重源や熊谷入道直実など有名な人々
は、一度や二度は必ず行っている。百万べんと一口にい
えば何んでもないようだが実際にやってみると大変なこ
とである。一日や二日で成満することは出来ない。そこ
で何とか短い日数でなしとげたいと思うようになった。
それについて有名な高野の明遍僧都の話がある。ある時
一人の修行僧が明遍僧都を尋ねて来た。明遍僧都ほどの
人になると時候の挨拶や世間話などされない。ぶっつけ
本番「貴僧は一日に念仏を何遍申されるか」と尋ねられ
た。するとその修行僧は「百万べん」と答えた。明遍僧

都はこの一語を聞いて「不実の者よ」といって顔をそむけ奥へ入ってしまった。ウソつき坊主め一日に百万べんも念仏が申されるものかと考えられたからである。その夜の夢に昼間の修行僧があらわれて「われは善導である」とみて汗を流されたという。八方手をつくして修行僧を探されたけれども、姿はどこにも見出せなかった。そこで明遍僧都はふかく反省して数珠を早くくって念仏すれば余念をまじえないでよいと杖に珠数をかけて、これを振り廻しながら念仏されたので時の人は「明遍のフリフリ念仏」とよんだという。

後醍醐天皇の御代に疫病が流行したことがあった。天皇は諸寺諸社に祈願をこめられたが鎮まらないう。そこで知恩寺の空円上人にも祈願をするようにとの勅命があった。空円という上人は賀茂の神官の息子である。自ら僧を望んで知恩寺に住職した人である。浄土宗では元來祈禱ということをやらない。しかしお念仏には万徳があるというので、この功德に頼るほかにないかと心を決めて、宮中において大念珠をくらしめ百万べん念仏を成満したところ疫病はおさまったので天皇からおほめにあづかり、その時使った大念珠と弘法大師の利剣の名号を賜った。今百万べん知恩寺におさめられている。これから宮

中では年中行事として年に二回ばかり行われ約百二十年間もつづいた記録がある。宮中はかりでなく、公卿の邸宅でも盛んに行われ、民間にも流行して三、四百人の人が集ったことが文獻に見出される。面白いことは、休憩の時にお茶やお茶の子が出されたことである。この頃の百万べんのお念仏の目的は、宮中では国家安穩宝祚延長であったが、民間では過去者追善、現存者安穩という祈願がこめられていた。

三 農作に結びついた念仏

地方へ行くと亡者追善に百万べん念仏が行われる。大念珠を大勢でくる。融通念仏式で大勢申す念仏を加算して百万べんを成し上げたことにするのである。虫除けや雨乞いのためにも行われる。江戸時代以後は宮中や貴族の年中行事の念仏ではなく農山漁村の行事となつていく。百万べん念仏はこの時代になると大勢の人が集つてやる。これは興味あることであるが、大勢集らなくても一人で出来ないものかとくふうしたのが知恩院第五十六世の教意僧正である。僧正は天井につるべを取付けさせて大念珠をかけ手ぐりで百万べん念仏を行われたとい

う。

筆者も田舎にいた頃、檀家の人が提灯をもって迎えに来る。田舎の集合はおそい。夜の八時頃から始まる。老人子供が輪をつくって大念珠をくり出す。筆者はその輪の中に座をしめて鉦をうって念仏する。大念珠が古くなると緒が伸びて間隙が出来る。これをくるとザラザラ音があるのである。子供等は面白がってその音を楽む。大きな房が百回廻ると百万べんということになったとする。供養に大に与えるような大きな碗に小豆飯が山盛にしてある。油揚げの煮たものカラシあえ、豆腐汁が出る。その粗朴な中に郷土の睦じさというものが感じられる。虫除け行事も懐しい。夏の夕、村人が手に手に松明を持って稲田の畦道を「イモチおくり」といながら進んで行く、筆者はその間本堂でお念仏するのである。恐らく昔は百万べん念仏を行ったものであろう。農家にとってはイモチ病ほど恐ろしい虫害はない。農業の進歩で、こうした懐しい民俗行事も失われて行くのでなからうか。

浄土宗の百万べん念仏の根本道場のすぐ前が京大である。かつて流血騒動を起した学生、ゲバ騒ぎは今もなお一部につづけられている。

筆者の学生時代は弊履破帽を誇りとしていた。教授にも絶対洋服を着ない先生がいた。奇行に富んだ喜田貞吉博士は袴の横に手拭をぶら下げておられた。教室内は禁煙だったが、先生は諸君ちょっと内緒だぞといってうまそうに一服やっておられたことなど思出である。カッコいい学生や教授など殆んど見られなかった。学問のために身心を打ち込み熱のある講義は学生の熱血をゆり動かした。焼芋を食いながら読書三昧に耽ける者が多かったのである。

勅命によって身命を抛って疫病退散の祈願の念仏を修した空門上人は向側に起っているゲバ学生の騒動を何と見ておられるであろう。出来れば和一連の大念珠をくって百万べんの念仏でもしてみれば、若人の魂に何かが響くであろう。

道

岩間への道

高橋義和

わたしは今、法然上人の郷土史的な伝説を調べている。調べると案外、いろいろな伝説が発見されて、今更ながら歴史という長い月日の流れのなかに、すっかり伝説がふ化して、立派な雛になって今新しく心をとらえるのである。

伝説は、いくら派生していてもたのしい。史実を離れたものであっても、我々の法然上人に対する信仰が崩れるものではないし、その伝説を調査することによって、更に法然上人への温かい人間的な血を、通わすことも出来るのであると思うとたのしくなってくる。

そこで今度はそうした伝説を追いながら、岡山県の棚原町の本山寺に案内してみることにする。

この本山寺は、法然上人の両親である漆時国夫妻が参詣した寺であって、この寺の十一面観音に祈願をして一子を授かったのであるが、その一子が勢至丸、後の法然上人である。

なんでもこの寺に参籠した夫妻が、この十一面観音に、「心願成就するなれば、必らずこの枝芽を生ずるのであるう。」

と、桜の枝をさしたそうで、その後この枝が根を生かし、桜の花を咲かせ、逆木（さかき）の桜として、寺の境内に残っている。然し、現在ある桜は、それから三代目にあたるといわれているが、春に美しい花を添えてくれている。

この本山寺は岩間の観音と称されている天台宗の寺院であって、その歴史は相当古いものであるよう。

なんでも奈良時代、文武天皇の御代、修験の大先達である彼の小角がここで修練したところであるらしく、後に天平年間、中国から渡来した鑑真（がんにん）和尚が再興したと伝えられる。

そのとき、十一面観音を安置して、本山寺と改めたらしい

が、それまでは新山寺という名であつたらしい。

古い時代は、一山の寺院が百二十場もあつたというから、なかなかの名刹であつて地方の人々から非常に信仰をうけていたのがこの寺である。

そういつたことから、漆時国夫妻も、子なきことを憂えて、この寺に参籠して靈験をうけたのであるが、その夫人、すなわち法然上人の母は、この岩間寺の観音に日参し、毎夜、灯明をあげて御本尊にすがつたという灯明の松というのが、今もなお当時の様子を伝えているのがなつかしい。

この寺の建物は、重要文化財に指定されている本堂、常行堂、御霊屋、三重塔、それに建文二年と、康承三年の石塔婆があるが、古い歴史を物語っているようである。

本堂の解体修理も完成し、今日その建造物も整っている。この寺の本堂は、正平五年（一一三〇五）に再建されたもので、廻廊を加えると、十間四面というもの、檜皮葺（ひはだぶき）で、千鳥・唐破風入母屋造りであり、こうした建築様式では、日本最古ということである。

さて、この岩間の観音に参籠したことについて、四十八巻伝では、

そもそも上人は美作の国、久米の南条福岡の庄の人なり、父は久米の押領使、漆時国、母は秦氏なり、子なきことを

なげきて、夫婦ころをひとつにして仏神に祈り申すに、秦氏夢に剃刀をのむとみてすなわち懐妊すと、記されている。

その仏神に祈り申すに、というのが、この岩間の観音であるといえるが、法然上人の伝記のなかには、はっきりと岩間の観音と記しているが、おそらくこの地方における大衆と結びつきのあつた寺であつただろうから、必然夫妻の帰依もここに向けられたのではないだろうか。

この寺に詣でるのには、岡山から津山線に乗りかえて約一時間、誕生寺駅の手前の弓削（ゆげ）駅で下車して、タクシ

ーで二十分であるから六キロの距離である。道は曲りくねっているがやっぱり山道である。そしてのぼりつめたところが台地になっていて、そこにこの寺が建てられている。

昔の人なら、誕生寺から歩いても行けるところであるだけに、両親の参詣も度々あつたことであろう。

この寺のある近くの弓削は池大納言家の領地であつたら、相当古くから栄えたところであると思われる。

今は宅地造成も出来ているがまだまだ田舎の町の風情は残っている。

浄土宗列祖の

墨蹟をたずねて

今以之授弟子聖聰^{（明徳）}畢。早以^{（聖岡）}此旨趣可被弘通^レ之候。同^{（二）}西極月念日^{（一）}

了蒼御在判

安養雲潮^{廿二歳書レ之時}

第子穩蓮社令授与事 釈道養（花押）

今回は増上寺九世・大厳寺開山道養貞把上人の筆蹟を紹介してみたい。道養貞把上人は室町時代の後半に、関東地方において活躍された浄土宗白旗派の高僧である。特に道養上人は浄土宗の伝法史上注目される方である。浄土宗の五重相伝は室町時代初期に於て聖岡上人や西養聖聰上人によって原型が作りあげられた。道養貞把上人は両上人の伝法を継承されると共に、新たに道養流の伝法を確立された。この道養流は現在も、道養上人の高弟感養存把上人の提唱された感養流と共に重要な二大法流である。

ここに紹介した写真は室町時代の関東地方の五重相伝の形態を示す貴重な史料である。これは現在も千葉市の生実大厳

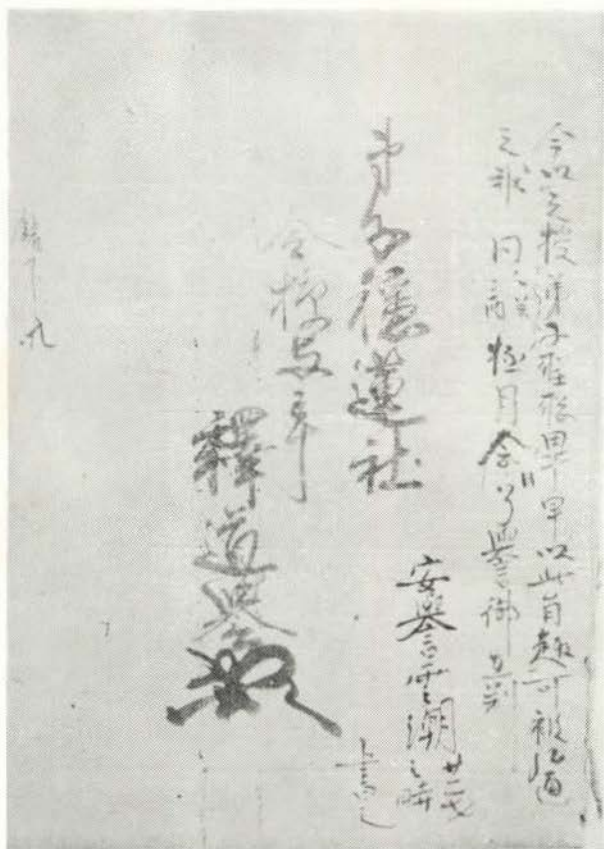
寺に残っている『銘心抄』の奥書である。

この奥書を見ると『銘心抄』は明徳四年（一三九三）十二月に了蒼聖岡上人から西養聖聰上人に授与された書物であることがわかる。『銘心抄』は五重相伝の第四重の『授手印決答疑問抄』の注釈書である。了蒼聖岡上人が五重相伝の注釈書を西養聖聰上人に授けているところを見ると、このころまでには五重伝法が確立していた。

それはともかく、この『銘心抄』を道養の弟子大厳寺二世安養虎角雲潮が書写している。安養が五十二歳というから求禄二年頃のことであろう。この写真の点線までの部分は安養の筆蹟であり、後半の部分が道養上人の自筆である。穩蓮社とは安養のことである。これによると、道養上人は弟子の安養に五重を許可する時に、安養自身に自分が継承した注釈書等を全て書写させ、その末尾に自署のサインを加え法流の伝授を証明しているのである。この頃の伝法は弟子が師匠の書物を自分で書写し、匠の印可をうける形式をとっているものが多く巻物の形式になるのは後世になってからであろう。

道養上人は増上寺の興隆や大厳寺の草創に功績のあった僧であり、非常に迫力のある字であるこの写真は数少い道養上人の筆蹟であり、また伝法史上にも貴重な史料である。

（宇高良哲）



増上寺九世
大嚴寺開山
道誉貞把筆

「浄土」購読規定 一部 定価 百円 (送料十二円)	会費一力年金一、二〇〇円 (送料 不要)	浄土 五月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十七年四月二十五日印刷 昭和四十七年五月一日 発行 定価 百円 編集人 宮林 昭彦 発行人 佐藤 密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行所 法然上人鐵仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒一〇二 振替東京八二一八七番
---	---------------------------------	---------------	---	---

日韓提携により韓国々宝を初めて全巻刊行

高麗大藏經 影印本

寺宝に/学究の座右に/寺院への寄贈に…

- 700余年を経た古典 (造本・体裁)
- 超宗派の原典 縦 37cm
- 世界唯一の経板による 横 27cm
- 完璧な集録 厚さ 7cm
- 写影であるから1字1句誤りがない

ご契約を戴いた節は、国宝にふさわしい書架、般若経の額を贈呈致しております。

ご要望により、カタログの送付又は係員が参上の上御説明申し上げます。

アジア文化事業株式会社

代表取締役 市田 一 夫

東京都新宿区西新宿8-3-31

電話 東京(03)-371-0125(代表)



(ページ数)平均1150ページ

新刊

柴田六五郎 著

まんだら和尚行状記

附徳本上人小伝・豪潮律師小伝

昨年12月初版

忽ち再版

江戸末期から明治にかけての信仰不毛といわれた時代にまことの宗教者として生き抜いたこれらの人々の記録は今こそ我々に人生の真を語りかける。

価 1,500 円 千 140 円

南無山房発行・法然上人鑽仰会扱